

## 「足に履く平和の福音の備え」

エペソ人への手紙 6 : 13 - 17

May.31.2026

### エペソ人への手紙 6 : 13 - 17 (パウロ)

#### Preface

この聖書箇所から、私たちが取るべき神の武具について学んでおります。  
今朝は、この中の、「足には平和の福音の備えをはきなさい」という御言葉について考えていきたいと思っております。

「足には平和の福音の備えをはきなさい」という御言葉を聞きますと、イザヤ書 52 : 7 の「なんと美しいことか、良い知らせを伝える人たちの足は」というローマ書 10 章にも引用されている御言葉が連想されるかもしれません。

ですが、今日学ぼうとしています「足には平和の福音をはきなさい」という御言葉は、所謂宣教とか、伝道とか、クリスチャンたちがどれだけ熱心にイエス様の福音を宣べ伝えるべきなのか、「時が良くても悪くても、しっかり御言葉を宣べ伝えなさい」という勧めとは、少しニュアンスが、意味合いが違うように感じます。

つまり、エペソ書 6 : 15 の「足には平和の福音の備えをはきなさい」とは、「福音を携えて宣べ伝えるために飛び回る準備をきなさい」ということではなく、この暗闇の世界の支配者たち悪魔の策略に対して堅く立つために、もろもろの悪霊と格闘するために私たちが身に着ける神の武具、戦うための武具だということなのです。

まあ結局は、両者ともに相通ずるものであり、福音を宣べ伝えることは悪魔に対抗することですし、悪魔に対抗することは福音を宣べ伝え生きることですので、行き着くところは繋がっているように思います。

コインの両面、コインの表と裏のような関係とも言えるかもしれません。

一方は、人と向き合い、一方は、サタン・悪魔と相対しています。

ですが、今ここエペソ書では、キリストを信じる者に既に与えられている永遠の約束の福音を地の果てまですべての人に、時が良くても悪くても宣べ伝えるための準備というよりも、私たちに戦いを仕掛けてくる悪なる者たちサタンや悪魔から、キリスト者がキリスト者であることを守り抜くために身に着けなければならない霊的武具であるという面が強調されています。

つまり、キリスト者たちに武装を求めているということは、キリスト者とは決して、常に平穏無事な中でこのうのうと生活しているのではなく、敵の中で、敵軍の中で、キリスト者としての本分を全うしなければならない戦いの中を生きているということが前提だということです。

私たちは今、死もなく、害もなく、涙もなく、悲しみや痛みもないところにい

るわけではありません。

逆に、どこにあっても、サタン悪魔は隠れて虎視眈々と私たちのことを付け狙っており、誘惑と苦難があり、迫害もあり、神であられる主イエスを十字架に架けた勢力が力を振るっている中で信仰を生きております。

その中で、私たちが私たちをどのように守り、何の戦いのために、何を準備しなければならないのかという問題を私たちに教え諭して下さるために、使徒パウロ先生は、今、この文章を書いておられます。

ゆえに私たちは、これまで学んで来ましたように、腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、そして、足には平和の福音の備えを履くという武装をするわけです。

## Part One

私は軍隊に入ったことがないので、実際に体験したことがないのですが、軍人の方々に支給される軍備の中で、特に気を使って作られるのが履き物、軍隊用の靴・軍靴なんだそうです。

なぜならば、兵士の機動性に直結し、機動性を維持するために最も大事な足を守り、その機動性が戦いの勝負を決めるからです。

使徒パウロ先生が生きたローマ帝国の時代は、今のような軍靴は当然ながらありませんでしたので、革の紐で足にしっかりと結びつけるサンダルのようなものを履いて戦いに出て行きました。

普段履いていたサンダルと違ったのは、より丈夫な革紐であったのと、何か鋭利な物が突き破って来ないように、特別に靴底を丈夫にこしらえた物でした。

戦闘において勝つために求められるのは、昔も今も変わらず銃や大砲などの火力のようですが、先程言いましたように、どんなに強い火力を持っていても、機動性が劣っては勝つことが出来ません。

機動性こそが、戦闘の勝利において最も重要な要素です。

この機動性を生かし戦った、人類史上最も戦闘に長けていたと言われる3人の人物がいました。

誰なのか、ご存じでしょうか？

古代マケドニア王国のアレキサンダー大王と、モンゴル帝国のチンギス・ハンと、フランスのナポレオン大帝だそうです。

この3人に共通した点が、機動性に優れていた、即ち、卓越した機動力を誇る騎兵隊を始めとする軍隊を率いていたということです。

そして、その軍隊の機動力を支える道具として大切にされていたのが、履き物でした。

つまり、何を、どう履くのかということが、戦闘における勝負を左右したということです。

これまで学んで来ましたように、腰の真理の帯を締め、胸に正義の胸当てを着

けたならば、次に戦うためにしなければならぬ行為は、立ち上がることです。

横になっていては、戦うことは出来ません。

地にしっかりと足をつけ、戦うための足場を保ち、力を発揮するための足場を整えることが「足には平和の福音の備えをはきなさい、福音をもって武装しなさい」ということです。

では、福音をもって武装するとはどういう意味であり、なぜそれが必要なのかということですか。

## Part Two

聖書は、「キリストを信じる者は、キリストの兵士として立っている」と教えます。

神が備えて下さったすべての武具を身に着け戦うよう神によって召し出された愛の兵士がキリスト者であり、義と敬虔と信仰と愛と忍耐と柔和を追い求める良い戦いを立派に勇敢に戦わなければならない者たちです。

「何も兵士なんて言う荒々しい表現を用いなくても良いんじゃないか」と思ってしまうところもあるかもしれませんが、イエス様の公生涯の姿を見ますと、その意図が見えてきます。

イエス様の3年間の公生涯を特徴付けるもののうちの 하나가、いつも論争に巻き込まれ、また論争のただ中にいらっしやっただということですか。

イエス様が行かれたところには、いつも平和があり、いつも癒しがあり、いつも慰めがあり、いつも悔い改めがあり、いつも救いがあったというのは事実ですが、それと同時に、いつも衝突がありました。

なぜか？

暗闇の中で霊的に目を閉ざしてしまっている人々、自分の背きと罪の中に死んでいた者たち救い出し、贖い出すために、彼らを驚づかみにしているこの世の流れを作っている空中の権威を持つもろもろの悪霊や悪魔を撃破する霊的戦いが、いつもそこにはあったからです。

福音書を見ますと、イエス様が宣べ伝えなされた福音には、いつも、病にある者が癒されたり、死んでいた者が生き返ったり、悪霊が出て行くというような私たちがからしますと奇跡に思えるような出来事が一緒に起こっていたことが記録されています。

### マタイの福音書 4 : 23 - 24 (パワポ)

このような聖書箇所の記事から、「イエス・キリストを信じれば病にかからないし、病にかかるのは悪霊につかれているからだ。イエス様はいつも病を癒す時、悪霊を追い出していたんじゃないか」と言われたりすることもあるようですが、そういうことを言いたいのではないように思えます。

もちろん、病の癒しとともに悪霊が出て行くということもあるでしょうし、病

の癒しを主に祈ることはとても大事なことです、ただ単純に病を治したければ病院に行けばいいだけのことです。

大事なのは、痛みや苦痛が取り去られ健康へと変えられるということを信仰していたところから、主イエス様を信じて生きることへと導かれ、その痛みや苦痛の中にある神の意図を、神のみこころを、霊的論しや理解を悟らせて頂くという霊的視野が開かれた。

つまり、唯一まことの神を知らないところから、唯一まことの神を知る者へと変えられたというのが、病の癒しや悪霊が出て行ったという現象の本質的な意味です。

神様は、必要ならば、私たちを一生涯、病の中に置いておかれることも御出来になりますし、そうされるかもしれません。

使徒パウロ先生も涙ながらに、ご自分の肉体のとげを癒して下さるよう三度も主に願いましたが、主なるイエス様からの応答は、「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力はあなたの弱さのうちに完全に現れるから」というものでありました。

それに対して、パウロ先生は、「ですから私は、キリストのゆえに、弱さ、侮辱、苦悩、迫害、困難を喜んでいます。なぜなら、私が弱い時にこそ、私は強いからです。もし誇る必要があるなら、私は自分の弱さのことを誇ります」と、主にある霊的悟りを、霊的視野を与えられたことを喜び、感謝しました。

もちろん、神様は、私たちの病を癒して下さるお方です。

でもしかし、キリスト教は、キリスト教信仰は、ただ単純に病気を治す宗教ではありません。

逆に、「病気にかかる宗教」と言っても過言ではないかもしれません。

お金を稼がせてくれる宗教ではなく、破産、倒産、一文無しになってしまう可能性を大いに秘めた宗教とも言えるかもしれません。

お金を稼ぎ、成功し、病にかかりたくなければ、占いでもいいですし、それを歌っているところに行くか、または、罪の中にあるこの世の流れと仲良く、仲睦まじく過ごせば、そう望んだようになるかもしれません。

ですが、私たちキリスト者は、主が望まれる人に変えられるために、主の御前に聖なる者とされるために、主の前に傷のない者とされるために、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するために、必要ならば、患難と迫害と困難を甘んじて受けると覚悟している者であり、そこを通ったからこそ気付かされる真の喜びと御霊の実を約束されている者たちです。

ダビデの言葉が思い出されます。

息子アブサロムに謀反を起こされ、王座から陥落し、逃亡者となり、ダビデのことを不当に憎んでいた者から呪いの言葉を浴びせられた時、その者の首をはねようかとダビデへの忠誠心をもって進言した家来に言いました。

「私を呪うままに、したいように放っておきなさい。主が彼に、私を呪うよう

命じ、『あなたはわたしの心になわかない』と言われるなら、どうか、主が良いと思われることをこの私にして下さるように。」(サムエルⅡ 15:26、16:10-11)

ダビデにとって唯一まことの神を信仰するということは、病や患難や困難や迫害を取り除いて頂くことが目的ではありませんでした。

病の中に、患難の中に、困難の中に、迫害の中に主の御心を探り、その中だからこそ深めることの出来る主との関係を深め、主が何を望んでおられるのかを探り、主が私に気付いてほしいことが何なのかを探り、求め、主なる神のみが自分という人の主権者であられ、主なる神ほどに自分のことを真に思って下さる方もおらず、自分の中にある悪いものを悪いままで残しておくことをされず、その悪いものを取り除くために一生懸命に自分に働いて下さるお方がダビデにとっての神であり、そんなお方との関係を深め続けていくことが信仰でした。

### Part Three

ではなぜ、イエス様の福音伝道には、病の癒し等の奇跡が伴っていたのか？ イエス様の病の癒し等の奇跡には、どう意味があるのかということです。

聖書には、人よりも先にサタンが墮天使となって墮落し、墮落した勢いで、唯一神のかたちに造られ神の霊が吹き込まれた神の愛する人を誘惑し、自分たちと同じように墮落させ、のろいの中をものがくように生き、死に行く者へと変えてしまった人にとって最も深刻な霊的事実が記されています。

即ち、その人へののろいが、どのような形であらわれた方と言いますと、死です。

人にとって最大の最後の敵である死をもって、人は、自らのろわれた存在であることを否応なしに実感することとなりました。

そして、その死に至らせるのに現れる具体的な症状が、私たちの肉体に起こるありとあらゆる病たちです。

日本では、どんな人も最後に亡くなる時は必ず、医師の死亡診断が付きますが、事故や怪我や老衰でさえも人の罪の営みによる結果だとするならば、皆、病をもってその命を終えます。

つまり、病とは、死の象徴です。

私たちが生きるこの世界は、神の前に罪を犯した罪人同士集まった世界です。

露骨な悪、もしくは、これが一番多くこの世に蔓延っている悪かもしれませんが、巧妙な悪、悪のような顔をしてはいないけれども、その内実は、だまし合いであり、傷つけ合いであり、陰で中傷し合いながらどれだけうまく出し抜くかの戦いが、生き方になってしまっている世界。

「私はまた、あらゆる労苦とあらゆる仕事の成功を見た。それは人間同士のねたみにすぎない。これもまた空しく、風を追うようなものだ」と、ソロモンが伝道者の書 4：4 で言っている通りの世界です。

「義人はいない。一人もいない。神を求める者はいない」という病に冒された世界です。

でも、人をお造りになられた父、御子、聖霊の三位一体なる神様は、そんな死という病にかかってしまった人を居ても立っても居られないような思いで、「何とかする」と、その暗闇からお救い下さることを決心なさいました。

私たちの罪が、緋のように赤くても雪のように白くし、紅のように赤くても羊の毛のように白くして下さるために、神自ら十字架に架かり、私たちを驚づかみにしている暗闇の支配者たちの権勢を砕き、私たちをその所から引っ張り出して下さると決心なさいました。

つまり、イエス様が福音を宣べ伝えた時に、病にかかった者たちが癒されたということの意味は、悪と腐敗と空しさの原理の中で死が支配しているその世界から救い出す、贖い出す、引っ張り出すという、死がいのちに打ち負かされるということを目に見える形で分かりやすく現した、現れたということです。

永遠のいのちを宣べ伝えにいらっしゃったイエス様が、死の権勢の中に閉じ込められている人々を救い出す、引っ張り出す、贖い出すという霊的戦い、戦闘をしておられるということが、人はやがて死にますから一時的ではあれ、病を癒やすということをもってあらわされたということです。

それでも私たち人は、やがて病にかかり一度死ぬことが決まっていますが、そんな私たちにイエス様は、「私はよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。今生きてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません」という言葉をもって、「もうその死は、死という意味を成さないものとなりました」と宣言して下さいました。

イエス様の福音宣教に伴う病の癒しや悪霊が出て行くというようなことは、病が癒されることや悪霊が出て行くことが目的ではなく、主イエスの福音を所有する者とされ、その存在自体が根本的に変わった、変えられたという現れであり、この世にあってもどんな状況や環境であっても神の国を生きる神の国の民となったという消えることのない刻印が押されたということです。

霊の戦いに臨む者と変えられたということです。

ルカの福音書に、ツァラアトという病に冒された10人すべてがイエス様に癒して頂いたにもかかわらず、神様のことをほめたたえ、イエス様の足もとにひれ伏しながら感謝するために戻ってきたのはたった一人だったという聖書箇所があります。

このたった一人の人にとって、イエス・キリストを信じるということは、病気を癒してくれる宗教でもなく、お金が稼げるようにしてくれる占いでもなく、この世の成功へと導いてくれる処世術でもなく、神との関係回復、神にあつて神の子とされたという身分の回復、それまで見えなかったものが見えるようになったという霊的目の開眼、人として本来知らなければならない神の存在という真実を知ったということであり、その真実のために霊的戦いに臨む覚悟をしたということでした。

でも、戻って来なかった9人の方々にとっては、病気を癒してくれれば、お金

を稼がせてくれれば、成功へと導いてくれれば信じられる、「信じてもいいよ」という一宗教でしかなかったのかもしれませんが。

果たして私たちにとって、イエス様を信じるとは、どちらなのでしょう。

### Part Three

この世は、残念ながら、福音が嫌いなようです。

死が、この世の王だからなのでしょう。

でも、私たちキリスト者は、そういう中でいのちを持つ者となりました。

この世は、暗闇です。

でも、私は、私たちは光です。 光とされました。

光と闇が混じることは出来ません。

混じる方法が存在しません。

まことの光として来られた主イエス・キリストを信じる者となり、福音を私たちの中に受け入れた瞬間から世と混じることが出来なくなり、水と油をどんなに混ぜようとしたところで混じり合わないように、混じり合わなくなりました。

世は、私たちがまことの光であられる方を信じたという事実を追い出そうとし、どんな手を使ってでも、その火を消そうと消し掛けてきます。

なぜなら、光があると、闇が消え去ってしまうからです。

ですが、主なる神様は、そんな私たちキリスト者を天国に連れて行くことはせず、この暗闇の世界に置いておかれます。

そして、「強くありなさい。雄々しくありなさい。恐れてはなりません。世の光であり、塩でありなさい」と語り掛けて下さりながら、「信仰の上に堅く立ちなさい」と仰います。

これが正に、キリストにある聖徒たちの戦いであり、キリスト者が神の兵士であるという立ち位置です。

光として隠れることなく、キリストを信じる者として光を輝かせ、この世と調子を合わせず、光としての生き様を全うすること、これが、キリスト者として召し出された者たちの姿だと言います。

では、私たちは、どれほどに、この姿を覚えながら生きているのでしょうか。

もしかしたら、信仰という秘密のカードを見せれば電車がただで乗れ、道行くタクシーが停まり、買いたい物が特別価格で買えるという風に、私の必要な物、私が欲している物を優先的に神様が回してくれるチケットのようなものとして、信仰を考えてばかりいてはいないだろうかと思わされます。

でも違いますよね。

福音の備えを履く人とは、「私という人はこの世とは違う人である、この世の目的とは違う目的を持っている人として明らかに区別され、この暗闇の中にあつて光として立つ人」を意味します。

神様が私という人をお立て下さったそのところで、立つことです。

例えば、私たちが生活するために必要な水を得るためにダムのような物を作るとしたら、最初にしなければならないのは、川の流れを止めることです。

川の流れをせき止めるのに先ずしなければならないのは、大きな石を投げ入れて、いったんその流れを留めることです。

そして、投げ入れた大きな石の隙間から出て来る水を止めるために、小さな石たちでその穴を埋めていきます。

大きな石に支えられて、小さな石たちがその任せられたところで役割を果たすことが出来、ついに生きた水を得るためのダムが出来上がります。

これと同じように、「足には平和の福音の備えをはきなさい」とは、神に敵対する怒涛の流れ、死と暗闇、墮落と肉の欲のままに生きる中に光として、主なるイエス様を知る者として、その流れをせき止める者としてその流れの前に立ち、耐え、神から顔を背ける暗闇に光を放ち、死が支配する世界にまことのいのちを提示し、その大きな流れに流されて行ってしまう人々を最小限に留めるために立ち続けることです。

主イエス・キリストを礼拝する者として、福音を知る者として、福音を所有する者として、神の子として、神の忠実な兵士として、聖なる戦いを、愛と忍耐と義と柔和を追い求める信仰の戦いを立派に戦う者として立つことを求められています。

立つのです。

逃げるのではなく、隠れるのでもなく、立つのです。

クリスチャン人口1パーセントに満たないすべてのクリスチャンたちが立つならば、そこから、何かが起こるはずだと思ったことはないでしょうか。

至って自然と二心を使い分ける、日曜日はクリスチャン、それ以外の曜日はノンクリスチャンとして生きるのではなく、クリスチャンとして立つのです。

辛抱して、主にあって立つのです。

主にあって立つことを通して、神の御前に聖なる者としての本分を生きるのです。

私たちが立つべきところで、その置かれた場で、立つのです。

流れを断つために立って、光を放つのです。

隠れていないで、立つべきところに立つのです。

これが、「福音の備えを足にはく」ということなんだと思います。

「福音の備えを足にはいた人」として挙げられる代表的な聖書の登場人物が、アブラハムという方だと思います。

最後にアブラハムの聖書箇所を見て終えたいと思います。

## Part Four

### 創世記12：1-3 (パワポ)

この聖書箇所を、「神様はアブラハムを、私たちとは違い特別扱いし、特別に

愛し、アブラハムに良くしてくれた人には良くして下さり、アブラハムに害を与えた人にはとてつもない害を与える」なんていう風に解釈したら、とんだ見当違いになるかもしれません。

もちろん、この御言葉の内容は、アブラハムに特別に与えて下さった約束であり、特別な祝福であるとは思いますが、それと同時に、すべての神を信じる者たちに、すべてのイエス・キリストを信じる者たちに求めておられる神の大いなる命令でもあると思います。

どんな命令かと言いますと、新約聖書の「あなたがたは世の光であり、地の塩です」というイエス様の御言葉と同じだということです。

「あなたは祝福となりなさい。地のすべての部族は、あなたによって祝福される」という御言葉の意味は、アブラハムが神に出会ったように、アブラハムに出会った人々が神に出会うようにする責任が、アブラハムにあるということです。

アブラハムは、もうこれ以上、隠れて生きることは出来ない身分となりました。

自分が生まれ育った土地、親族、父の家とは違う知らない土地、敵対している土地、快く迎えてくれない所に行って、すべての人たちの前で、神を信じる人、神を頼りにしている人、神ゆえに生きている人、神が求めることにはいつでも正直で、聖であろうとし、誠実で、忍耐して、謙遜で、柔和な人として生き、彼を見た人たちが神を見、神の前に全面降伏して、神を渴望する人へと変えられえていくよう、アブラハム自身の全生涯を生きる使命のために召し出されたということです。

これが、「平和の福音を足にはく」ということです。

実際に、アブラハムを通してたくさんの人々が神の前に帰ってきました。

私達もそのうちの一人です。

私達こそ、アブラハムに連なる神の子とされた者たちです。

血縁のイスラエルを遥かに超えた、霊的イスラエルとされた者たちです。

家族、教会内だけが全てなのではなく、その人生を通して出会う全ての人たちが、私達を通して、福音と主イエス様とその十字架の愛を知っていき、主にある兄弟姉妹となるために立ち続けるのです。

一方、アブラハムの甥のロトは、アブラハムと同じ神を信じ、救われ、一緒に、親族、父の家を出て来た者でありましたが、アブラハムとは真逆の生き方をしてしまいました。

神を信じることは辞めませんでした。同時に、この世を好み、この世に興じ、この世を目標とすることも放棄することはなく、ソドムとゴモラを選び取って行きました。

神様が、ソドムとゴモラの罪が重篤なのを見て滅ぼすことをお考えになった時、その滅びから免れる唯一の条件が、「十人の正しい者がそこにいること」でしたが、ソドムとゴモラには、たった十人の正しい人さえも居ませんでした。

「その正しい十人を、誰が作り、誰が誕生させなければならなかったのか？」

と言いますと、ロトです。

ロトが、ソドムとゴモラの地に、神の前に義とされる人を生み出さなければなりませんでした。

でもロトは、自分の生き様を通して、義とされる人を生み出すことが出来ませんでした。

妻でさえも、二人の娘の夫たち・お婿さんたちでさえも、彼の言葉を聞こうとはしませんでした。

結局は、それまで蓄えた膨大なすべての財産を天からの火と硫黄に燃やされるまま捨てるしかなく、二人の娘だけを連れて、その火の中から命からがら救出されるかのように神の手によって救い出されました。

でも、結局ロトの子孫たちは、モアブ人やアンモン人という偶像、人の貪欲をを神とする民となって行きました。

果たして、私たちはアブラハムでしょうか、ロトでしょうか？

### Conclusion

私たちは、私たちの足に、平和の福音の備えをはいているでしょうか？

神様が送り出して下さった先、どこでも構いません。

家庭、親族、職場、学校、地域社会、友人関係において、立っているでしょうか？

私たちこそ、アブラハムです。

私たちゆえに、すべての人々が神の祝福を受ける場に出て行き、立つのです。

私たちがその戦いを避けるならば、神の国は、この地に成らないでしょう。

キリスト者がキリスト者である責任を果たそうとしないならば、神の前にあって、逃亡兵になってしまうかもしれません。

もちろん、失敗もしますし、悩むことだってありますし、躓かせてしまうことだってあるでしょう。

それでも、私が祝福の源とされたその身分を隠すことなく、諦めることなく、全うしようとするならば、使徒パウロ先生が告白した「私は勇敢に戦い抜き、走るべき道のりを終え、信仰を守り通しました。あとは、義の栄冠が私のために用意されているだけです」という言葉が、私たちの告白となることでしょう。

私たちの戦いは、神のすべての武具を身に着けて戦う信仰の戦い、神の良き兵士として、罪の中に死んでいるこの世の流れを作り出す空中の支配者、もろもろの悪霊との戦いです。

その戦いの場に立つことを、立ち続けることを諦めないのです。

神がご用意下さった福音の備えの履き物を脱ぎ捨てて、ソドムとゴモラで遊び呆けているうちに世に巻かれていかないために、キリスト者としての身分を全うするのです。

神に期待されている戦いを戦う中で味わわせて頂ける勝利の味と喜びと奇跡

を日々体験し、私たちを祝福する者を神が祝福して下さることを見、私たちを呪う者がのろいとなる神の御業を実際に見させて頂きながら、立ち続けていきましょう。

お祈りいたします。

祝祷：あなたは祝福となりなさい。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。